



松江の石を
めぐる
ヒストリー



THE HISTORY OF STONES IN MATSUE



松江市

松江市の「ヒストリー」とは

松江市は令和3年12月に、文化財や歴史文化を保存・活用していくためのマスターplan、アクションプランでもある「松江市文化財保存活用地域計画」を策定し、文化庁から認定を受けました。この中で、豊かな歴史文化を結び付けたストーリーの連なりをヒストリーと名付け、特徴的なテーマに沿って作成していくことにしました。

“history”という英語は歴史、歴史書、発達史、変遷、来歴、沿革などと訳されます。語源は「知ること、調べることで得た知識」というギリシャ語といわれます。松江市は調査研究を重ね知りえた事実を使って物語にすることを、historyの語源に重ねて「ヒストリー」と呼びます。今後の調査研究によりあらわってくる成果も大きな要素として含みこんでいくとともに松江市という行政単位を越えて関連する地域の文化財ともネットワークで結ぶことを構想します。

「ヒストリー」を筋ぐるために、松江市は調査研究に力を入れていきますが、市民の皆様が参加する調査研究や他地域の研究者の協力を仰ぐことにより、その厚みが増していきます。これから列挙する「ヒストリー」は完成形ではなく、多くの人々がかかわることで更新され、また新たな「ヒストリー」が生まれることが想定されます。市民の皆様にヒストリーが共有されることにより松江の価値が高まるとともに、松江市民による地域づくりにつながり、継続的な関係人口の増加につながっていくことを目指します。

具体的には、①松江の歴史文化を伝える手段（ツール）として、②今後の調査研究テーマとして、③活用の素材として（地域振興素材、教育素材、産業振興素材、観光素材として）、「ヒストリー」を生かしていきます。

目次

I. メノウのストーリー	2
1. 石器石材	3
2. 玉の石材	10
3. 近世～現代のメノウ細工	21
II. 来待石のストーリー	24
1. 古墳時代の石材	26
2. 奈良時代の来待石	29
3. 中世・近世の来待石	31
4. 現在の出雲石灯籠から現代アートまで	53
III. 様々な石材のストーリー	59
1. 松江城築城に使われた石	59
2. 各地で使われた石	62
3. さらに古くから使われた石	67
IV. 石が語るヒストリー	72

松江の石をめぐるヒストリー



「島根半島・宍道湖中海ジオパーク」に認定されているように、松江は地質的に見ても多様です。長い時間をかけて複雑な地形や様々な岩石を生み出しています。

松江で産出する石には、先史以来、時代の要請に応じて様々な目的で用いられ、全国に広がったものも少なくありません。代表は玉湯町花仙山を中心に採集できる玉髓（メノウ・碧玉）と、宍道町来待を中心切り出された来待石（凝灰質砂岩）です。松江の石をめぐるヒストリーでは、この二つの石を中心に、そのほかの有効利用された石も取り上げて、自然が作り出した石が結びだす松江の歴史文化を紐解いてみます。

1. メノウのストーリー

約1500万年前に松江市乃木福富町から玉湯町にかけての花仙山一帯では、陸上の火山が噴出し、この火山活動で形成された溶岩は安山岩となって宍道湖南岸を形作る山となりました。この安山岩に地下から熱水が上昇し、隙間ができると、ガラスの主成分であるケイ素の微粒子が、脈状に沈殿した様々な色の玉髓（青メノウ・碧玉、赤メノウ、カド石など）が形成されます。安山岩溶岩は粘土化しているため、メノウは川筋や段丘の疊層などに転がり落ちており、たやすく採集できます。また、メノウ脈も採掘されやすく、約3万6千年前の旧石器時代から石器として、弥生時代からは勾玉・菅玉の材料として利用され、全國に広まりました。今でも、名産品として親しまれるメノウと人間の関係を物語るストーリーです。



松江市乃木地区から玉湯町に広がる花仙山



1. 石器石材

玉髓（メノウなど）の利用の歴史は、日本列島にホモサビエンス（現代と同種の人間）が到來した直後、約3万6千年前までさかのぼります。土器はまだなく、生活に必要な「刃物」のほとんどを石に頼っていた旧石器人にとって、割りやすく、割りとった片石の縁が鋭い刃になるガラス質の石は、生活に欠かせないものでした。自然のガラスの黒曜石が代表ですが、堅いながらも水晶のようにガラス質で均質な性質を持つ玉髓は、たたき割って石器を作るのに適した石です。後に玉として利用される「メノウ」のように、宝石としてではなく、打製石器の石材として珍重されたのです。特に、玉髓がたくさん採れる花仙山を擁する松江周辺では、主要な石器石材として、たくさん利用されていました。



碧玉（青メノウ）の原石（出雲玉作資料館）



東津田町南外5号墳の下層出土の玉髓製旧石器時代石器群

松江周辺の旧石器時代の石器　あまり知られていませんが宍道湖・中海周辺では

は旧石器時代の遺跡が多く見つかっています。石器の種類としては、石の槍、対象物を削ったり切ったりする石器などがあり、石材は玉髓を中心とする黒曜石、香川県の安山岩（サヌカイト）などが用いられていました。はぎとった石同士が

接合する例もあり、その場で石器の製作が行われた証拠となっています。

旧石器時代の人々は拠点を固定する定住は行わず、遊動しながら暮らしていました。1万8千年前～3万8千年前にわたるこの時代は氷期で、現代に比べても寒い環境でした。1か所にとどまっていたら、安定して食べ物を手に入

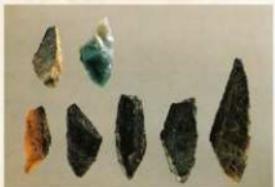


南外5号墳下層出土石器が接合した状況

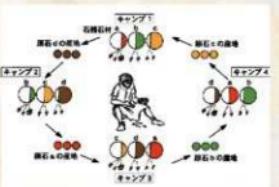
メノウで作られた槍先
(田和山遺跡出土)

れることができなかつたのでしょう。移動しながら隠岐で黒曜石を入手し、松江周辺で玉髓を入手して、それを原材料に石器を作っていたのです。旧石器時代の遺跡で当時の生活痕跡が残されているところでは、石器の出土場所はブロックという石器のまとまりを示します。その中の石器には多種の石材が混ざっていることが多く、当時の人々が状況によって様々な石材を利用していたことがわかります。の中でも、黒曜石と玉髓はとてもよく見つかる石材です。黒曜石や玉髓に加えて、瀬戸内香川県の安山岩や中国山地冠山の安山岩が出土する旧石器時代の遺跡の分布をみると、当時の小さな集団がどのように遊動していたかを推測することができます。

松江から運ばれた玉髓で作られた槍先やナイフ(左1点と右2点が玉髓、奥出雲町原田遺跡出土)
(島根県埋蔵文化財調査センター提供)松江から運ばれた玉髓で作られた石器
(広島県向泉川平遺跡出土)向泉川平遺跡の玉髓の剥片が接合した様子
(打ち割った順番や技術が読み取れる)



松江から運ばれた玉髓で作られた
槍先左下1点が玉髓(岡山県恩原1遺跡出土)
(稻田孝司／著・シリーズ「遺跡を学ぶ」65「旧
石器人の遊動と植民・恩原遺跡群」新泉社)

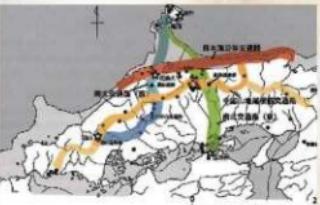


後期旧石器時代の遊動と石材产地を
めぐる動きの模式図
(稻田孝司／著・シリーズ「遺跡を学ぶ」65「旧
石器人の遊動と植民・恩原遺跡群」新泉社)



玉髓の割り方

原石(①)に打撃する面を見つけ、
ハンマー(石など)で適切な角度と力
で叩くと、石に力が抜けといって剥片
が剥離されます。(②)左下(①)は、
ハンマーを打った面です。旧石器時代
の人たちは、適切な角度と力、ハンマ
ーの性質を見極めて、石を割り、道具
を作りました。玉髓は石英の一一種でガ
ラス質が強いので、剥片の縁辺は鋭い
刃になります。



旧石器時代の中国地方の主要交通路



玉髓を使って製作された過程がわかる
接合資料と、槍先やナイフ
(鳥取県大山町豊成叶林遺跡出土 旧石器時代遺物
鳥取県埋蔵文化財センター画像提供)

旧石器時代の松江周辺の地形と
想定される交通路



複数の時期の石器群が見つ
かっている奥出雲町原田遺跡や
岡山県真庭市恩原遺跡群では、
各時代の石器群に黒曜石や玉髓
を材料としたものが混ざって
いることから、中国山地に分け
入った人々がいたことがわかり
ます。また、広島県和知鳥遺
跡や向泉川平遺跡など三次市や
庄原市近辺や、鳥取県巣重林
遺跡では、一塊の玉髓を割って
いった石器がたくさん出土して
います。何度も松江付近を経由
して旧石器人が遊動していた証
拠です。玉髓は中国山地を超えて
広く行き渡っているようで、
西は広島県冠山周辺、東は岡山
県まで広がりを見せるとともに、
平地沿いに東へも移動していた
ことがあります。

また、旧石器時代の末期、約1万8千年前には東北～北陸地方の人が到来し、湧別技法と呼ばれる独自の技術で、花仙山の玉髓を材料に細石刃を作っていました。恩原遺跡群からは、北陸～東北地方で産出する硬質貝岩とともに、多くの玉髓（黒曜石も含みます）を用いた湧別技法による石器が多く見つかっています。玉髓の産地、松江市花仙山周辺の玉湯町湯町の杉谷遺跡、面白谷遺跡、正源寺遺跡、宮ノ前遺跡からも、湧別技法によって作られた石器が出土しています。遠来の移住者たちは、地元東北の硬質貝岩を携えて山陰に到来し、貝岩がなくなってくると代わりの石材として玉髓を選びました。そして、移住者は玉髓を携えて各地を遊動し、松江を基点に中国山地、瀬戸内まで広がっています。大阪府羽曳野市誓田白鳥遺跡と山口県宇部市川津遺跡から見つかっている湧別技法に関わる石器も玉髓を使っていますので、関西から中国地方の西端まで松江の石



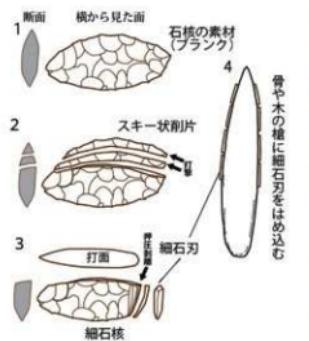
恩原遺跡の松江から運ばれた
玉髓を使った、湧別技法による石器
(稻田孝司／著・シリーズ「遺跡を学ぶ」
65『旧石器人の遊動と植民・恩原遺跡群』新泉社)



湧別技法の模式図
(稻田孝司／著・シリーズ「遺跡を学ぶ」65『旧石器人の遊動と植民・恩原遺跡群』新泉社)



玉湯町花仙山周辺から
出土した旧石器時代末期の石器



湧別技法の模式図

が動いている可能性もあります。石を動かしたのは、当時の東北地方を故地とした人々、またはその子孫でしょう。中四国地方に細石刃文化を広げたのは、メノウを持ち歩いていた旧石器人だったのかもしれません。



2. 玉の石材

旧石器時代が終わり、縄文時代、弥生時代とわずかながら打製石器の石材として利用され続けた玉髓（メノウ）は、弥生時代後期（約2000年前）から玉の材料として再び脚光を浴びます。やがて古墳時代前期後半（4世紀ごろ）から、日本列島全体に松江のメノウで作られた美しい珠玉が広がり、後期（6世紀～7世紀初め）には、全国でほぼ唯一の玉の生産地として全国に名をはせるのです。一度途絶した玉作も、奈良時代（8世紀ごろ）に新しく玉の生産が復活します。平安時代後期には再び、玉作は途絶えます。しかし江戸時代に末期に、工芸品としてメノウ細工が始まり、現在も松江の名産品として名を知られています。

①弥生時代の玉作

弥生時代の日本列島では、前期終わりごろ（紀元前4世紀の初めごろ、約2500年前）に、中国地方や北陸地方で管玉作りが始まります。管玉は大陸から伝わったストローのような管状の玉で、緑色凝灰岩や北陸地方で採れる軟らかい碧玉を用いて作っていました。松江でも軟らかい緑色凝灰岩を使って玉作が行われ、有力者の飾りとして流通していたようです。西川津遺跡や布田遺跡では、石を薄く割るために直線の溝を彫って打ち割る独特

の技法（西川津技法）で玉を作った資料が多く出てきています。

青メノウと水晶の利用 弥生時代の中期終わりごろから後期初めごろ（紀元1

年前後）、鉄器が玉作の道具として普及はじめ、水晶や松江産の碧玉（青メノウ）の加工が始まります。玉髓のうち緑色の碧玉部分が、まずは管玉の材料として利用されはじめ、後期終わりご



西川津技法の模式図
(溝を切って薄い板を作り、それをまた分割して管玉を作る)



西川津遺跡出土の弥生時代玉作の資料
(島根県古代文化センター提供)



出雲の硬い碧玉（青メノウ）で管玉を作る
(弥生時代終わりごろ松江市鹿島町堀部第3遺跡)
(島根県立古代出雲歴史博物館提供)



福岡県糸島市瀬地頭船跡出土の
花仙山産碧玉を使った玉作関係資料
(弥生時代終わりごろ)
(糸島市立伊都国歴史博物館蔵)



出雲地方の玉作遺跡分布
(松江市玉作関係出土遺跡を中心に集中している)

ろ（3世紀ごろ）には松江周辺の玉作職人は北部九州まで進出します。それまでの軟らかい石と比べて、硬くて深い緑色の松江の青メノウは、技術革新によって玉の材料となり、やがて松江は日本を代表する玉生産地になる第一歩をしるすのです。

硬い青メノウ（碧玉）や水晶を玉に加工した工房跡は、松江市矢田町の平所遺跡で発掘調査されています。弥生時代の終わりごろ、2世紀～3世紀のもので、水晶を丸玉やそろばん玉に、碧玉を管玉に加工しています。工房跡からは、針やたがねなどの鉄器が数多く出土しており、玉作工人集団が希少な鉄製品を手に入れて、堅い石材を加工する技術を身に付けていたことがわかります。これらの玉がどこに運ばれたのか、はっきりわかっていないが、弥生時代は硬質の玉は多くは出回ってはおらず、交易の対価として重要なだったものと考えられています。

②古墳時代の玉作

3世紀の後半、ヤマトを中心として日本列島の宮城県から鹿児島県までの広域に、古墳が作られるようになります。小さなクニがヤマトを盟主として連合し、大きなまとまりができたことを示しますが、古墳はその連合のあかしであり、権力の象徴でした。古墳は豪族の墓で、遺体を葬るときには、その身を飾る玉も一緒に納められるようになります。

古墳時代前期前半には、北陸地方の軟らかくて色の薄い碧玉が多く使われ、玉や豪族の力を象徴する武器や宝飾品を模造した製品が大量に作られました。しかし出雲の碧玉は、北陸産のものより色が深くきれいなため、次第に玉の素材として重用されるようになります。

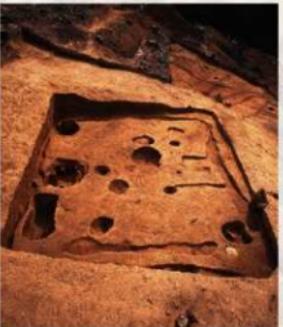
出雲ブランドの誕生（4世紀後半～5世紀） 古墳時代前期後半（4世紀後半）になると、透明感のある赤メノウや水晶が、勾玉や管玉、丸玉、切子玉などの材料として用いられるようになり、全国に赤、青、白の鮮やかな出雲ブランドの玉が供給されていきます。また玉を作った工房の跡も、松江周辺で数多く見つかるようになります。玉湯町の史跡出雲玉作跡や乃木福富町の大角山遺跡などがその代表です。



整備当時の史跡出雲玉作跡
(出雲玉作資料館提供)



史跡出雲玉作跡古墳時代の玉作工房跡



大角山遺跡で出てきた4世紀終わりごろの堅穴工房
(島根県埋蔵文化財調査センター提供)



勾玉未成品 古墳前期
(史跡出雲玉作跡)



古墳時代の勾玉・管玉の制作工程

出雲の赤・白・青の玉

- ①島根県立古代出雲歴史博物館提供
- ②島根県埋蔵文化財調査センター提供
- ③島根県古代文化センター提供
- ④奥出雲町教育委員会蔵、島根県立古代出雲歴史博物館提供
- ⑤知夫村教育委員会蔵、島根県立古代出雲歴史博物館提供
- ⑥大田市教育委員会蔵、島根県立古代出雲歴史博物館提供

全国の大豪族へ 全国に目を広げると、やはり前期後半（4世紀ごろ）の古墳には出雲の碧玉（青メノウ）や赤メノウ、水晶などの優品が出土していることがわかります。出雲の玉は、全国の有力豪族の古墳に納められ、被葬者を美しく飾っていたのです。

たとえば、京都府南丹市の園部塙内古墳で出土した管玉や矢尻形の碧玉製品、大阪府黄金塙古墳の大型勾玉、奈良県の新沢千塙323号墳、500号墳の赤メノウ、水晶の玉類は、全国を代表する宝玉の装身具と言えるでしょう。



奈良県新沢千塙500号墳出土の玉類
(奈良県橿原考古学研究所附属博物館蔵)



京都府園部塙内古墳出土の玉類
(南丹市立文化博物館蔵)
(奈良県橿原考古学研究所附属博物館蔵)
セントラル提供
(奈良県橿原考古学研究所附属博物館蔵)
島根県古代文化



鳥取県上ノ山1号墳出土の玉類
【勾玉は出雲の石】
(鳥取県立博物館蔵)
(島根県立古代出雲歴史博物館提供)



奈良県新添千塚323号墳出土の玉類
【メノウの管玉や切子玉は珍しい】
(奈良県立橿原考古学研究所
附属博物館蔵)



浜佐田町石田古墳出土の玉類
(下の白っぽい勾玉はヒスイ製)
(島根県立古代出雲歴史博物館提供)



西浜佐陀町釜代1号墳出土の玉類
(下の小玉は舶来のガラス製)
(島根県立古代出雲歴史博物館提供)

4世紀～5世紀の松江の玉 松江市でも宍道町上野1号墳、西浜佐陀町釜代1号墳、浜佐田町石田古墳、鹿島町奥才古墳群をはじめ、多くの古墳でその時期の碧玉やメノウの勾玉、管玉などが出てきています。全国各地で出てくる玉と同様に、美しく磨き上げられたものが多く、あわせてヒスイやガラスなどの玉も混ざることもあり、色とりどりの玉で飾られていたことと思われます。また、出雲大社境内遺跡で祭祀に用いられたと思われるメノウ勾玉も、花仙山産のものと考えられます。



乃木福富町大角山遺跡出土の
4世紀～5世紀の玉作関連資料（メノウ、青メノウ）



乃白町田和山A遺跡出土の5世紀の玉作関連資料
(内磨き砥石、メノウ、青メノウ、水晶、叩き石)



穴道町上野1号墳出土玉類
(中央の勾玉がメノウ、濃い緑の玉が碧玉)
(島根県立古代出雲歴史博物館提供)



浜佐陀町石田古墳出土管玉（模様が美しい） 鹿島町奥才34号墳出土勾玉（4世紀後半）



東津田町埴岡古墳群出土の玉類
(4世紀後半～5世紀前半)

玉造周辺に大生産地－6世紀～7世紀の玉－ 古墳時代後期（6世紀～7世紀初め）には、松江はほぼ唯一の石の玉生産地となり、日本列島の宝玉生産を支えました。このころになると、大王墓や地域の大首長クラスは金銀銅やガラスの玉を珍重するようになる代わりに、各地の中小古墳（今でいう村長クラスか）にたくさんの出雲の玉が納められます。出雲の玉を首にぶら下げたり、手首や足首に巻くことが、公の飾りとして広く認められるようになったものと考えられます。そして、古墳に葬られる時には、遺体に玉が飾られたのです。



玉湯町林43号墳群出土遺物（6世紀半ば）

東出雲町島田池横穴墓群
出土玉類

松江周辺でも、多くの古墳や横穴墓から玉が出土しています。めのうは勾玉、碧玉は管玉と勾玉、水晶が勾玉や切子玉、丸玉という作り分けがされているのですが、珍しい例として玉湯町の林43号墳の横穴式石室からは、水晶の管玉が一連出てきています。また大型古墳では出雲市の中塩治築山古墳からこれらの石で作られた玉が多く出土しています。



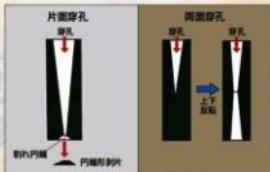
玉湯町堂床遺跡出土の6世紀の玉作関連資料
(筋砥石、内磨き砥石、メノウ、青メノウ、
水晶、滑石)
(島根県立古代出雲歴史博物館提供)



林43号墳出土水晶管玉

花仙山周辺には職人が集まって「玉作村」ができ、玉は大量生産され、松江市街地南郊の意宇平野に蟠踞していた出雲の大首長を通じ、全国の首長に届きました。この時に生まれた地名として、200年後に編纂された『出雲國風土記』に「玉作山」(花仙山)、「玉作川」(玉湯川)という地名がしるされているのだと思います。

出雲独特の技術 出雲の玉作りには独特の技術が見られ、その作り方から出雲の玉と判断できるものがあります。「片面穿孔」と呼ばれる、ひも通しの孔を開けるときに片側から錐揉みしていく技術です。玉に孔を開けるのは、



管玉の二つの穿孔技術断面模式図

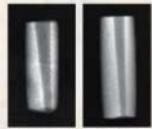
で貫通させるのは大変ですし、破損の危険性も高まるからです。古墳時代の勾玉だけではなく、5世紀後半からは管玉を作るとともにこの技術が使われました。細長い石に、片方からまっすぐに孔を開けていくことは、とても難しいことです。管玉の軸と同じ方向に、長い時間、錐を回転させなければいかなければなりません。大きな技術変革があったことがうかがえます。逆に、他の地域から出たものも、片面から孔を開けた管玉は、ほぼ出雲のメノウ類と考えることができます。



みちのくの出雲メノウ
(八戸市立博物館蔵)
(八戸市立博物館蔵)



出土の玉類
(7世紀前半)
（知夫村教育委員会蔵）
代出雲歴史博物館提供
（島根県立古



古墳時代後半の管玉の
X線透過写真
(左：福富I遺跡、
右：堂床跡遺跡)
(島根県埋蔵文化財調
査センター提供)

玉作りの中でも
難しい工程だつ
たと考えられま
す。石に孔を開
ける作業は古く
から行われてい
ますが、その大部分は両側から錐揉み
をして開けています。片方から最後まで
貫通させるのは大変ですし、破損の危険性も高まるからです。古墳時代の勾玉だけではなく、5世紀後半からは管玉を作るとともにこの技術が使われました。細長い石に、片方からまっすぐに孔を開けていくことは、とても難しいことです。管玉の軸と同じ方向に、長い時間、錐を回転させなければいかなければなりません。大きな技術変革があったことがうかがえます。逆に、他の地域から出たものも、片面から孔を開けた管玉は、ほぼ出雲のメノウ類と考えることができます。

後世まで大切に継承された玉 大切に保管された古墳時代の玉は、古墳の副葬や神マツリに用いられていましたが、その一方で日本で最初に築かれた寺院、飛鳥寺の塔心礎鎮壇(寺の堂塔を築くとき、土地の神々を鎮め、建物の末永い無事を祈つて行う行事)具にも玉は含まれていて、仏教のお宝として大事にされていたことがわかります。

7世紀の後半になると、玉は作られなくなります。ところが、それまで玉が出来ることのなかった岩手県や青森県などの東北地方で出雲の玉が出てきます。どこかで大事にしまってあった玉が、みちのくまで運ばれているのです。また、奈良時代(8世紀)にも北海道から出土するとともに、平城京の元興寺の鎮壇具としても使われています。

③奈良時代～平安時代の玉作

7世紀に一度途絶える玉作も、奈良時代～平安時代には再び盛んになり、碁石状の平玉を中心に生産が行われました。8世紀前半ころには花仙山周辺以外で出雲国府でも数多くの玉が作られましたが、8世紀後半以降には玉湯町周辺で生産されたようです。この時期の玉の用途は不明な部分も多く、県内では山代郷北新造院の塔跡から出土していることが知られます。性格は明らかではありませんが、建築物の鎮壇具として使われた可能性があります。文献によると中央政府や天皇家に献上されたことは確かですが、具体的な利用方法はまだ分からぬことが多いのが実態です。しかし、国家に関わる重要な儀式に利用された可能性が強いと考えられています。東大寺や興福寺など、平城京に建てられた大寺の仏像などに宝玉が用いられているのが知られており、仏教の法具に用いられたこともあったと考えられます。また、お墓に平玉と一緒に葬られて



出雲国府跡出土の奈良時代前半の
玉作関係資料



古墳時代の玉と奈良時代以降の玉(下)

いる例もあり、副葬品として用いられたこともあります。奈良時代から平安時代にかけて、玉に呪的な意味合いを込めていたことも多かったと思われます。その本格的な製作地は、全国で松江周辺でしか見つかっていません。



8世紀～9世紀の平玉・丸玉とその未成品
玉湯町蛇喰遺跡
(島根県立古代出雲歴史博物館提供)



8世紀～9世紀の平玉とその未成品
玉湯町岩屋遺跡
(島根県立古代出雲歴史博物館提供)



8世紀～9世紀の碧玉を使った平玉・丸玉とその未成品 (玉湯町蛇喰遺跡)

3. 近世～現代のメノウ細工

①江戸時代以降のメノウの利用

中世にはあまり用いられなくなるメノウですが、江戸時代になると火打ち石としての利用が始まります。とても硬い石で、火打ち鉄で強く打っても割れにくかったからでしょう。松江城下町遺跡の発掘調査で多くの火打ち石が出てきています。また、江戸末期には青メノウ(碧玉)や赤メノウを使った細工物の製作が活発になり、その技巧は素晴らしいものです。花仙山の良質なメノウは、19世紀初めごろに作られた『雲陽國益篤』では前頭に番付けされていますが、幕末ごろの『出雲名物番付』では「玉造瑪瑙」としてされ、「行司」として別格扱いされています。出雲国の人々が、メノウを特産品として意識していたことは間違いません。



出雲名物番付
(安政5年 (1858))



荒作りのための大小の「たがね」
細い先をメノウにあて、強い圧力で石をはがす



玉を磨く様々な道具



ブレスレットか 碧玉と紫水晶



笄 (メノウ)



たがねで形作られた勾玉形
細い連続した面が削がれた面

②近代メノウ細工

メノウ細工は明治になっても続けられ、明治43年（1910）の第10回関西府県連合共進会に出品された品の中には、瑪瑙水晶製品が含まれています。同年に創刊された松江商工会議所の機関誌『松江商工業報』には、とくに松江の工業を発展しうる要素として「瑪瑙」が挙げられています。

明治44年（1911）には出雲玉造瑪瑙業組合が結成されるほど盛んに生産されました。大正6年（1917）に松江市が調査した「松江市各種工業の概況」では、瑪瑙製品製造業として戸数が20戸と報告されています。

当時の細工は、メノウ細工専用の道具が用いられ、手作業として独特的な技術で作られました。古代と同じような勾玉も作られましたが、宝飾品の一部として和物のかんざしや洋風プレスレット、細かな細工品として置物などが制作されました。当時の道具類や製作工程は出雲玉作資料館で保管・展示されています。

その後、世界恐慌のころの価格暴落、戦乱や戦後の混乱期を経ながらも、メノウ細工は続けられました。明治から続く老舗のメノウ細工店も松江には残っています。



大正時代末期のメノウ細工所（出雲玉作資料館提供）

孔を開けるための鉤、針、小槌
木の上に未完成品を置いて孔を開ける

③現代のメノウ

現在もメノウ細工は島根県ふるさと伝統工芸品とされ、松江市を代表する特産品の一つとなっています。宝石やガラスを使ってネックレス・ブローチやタイピンなどの装飾品や置物などに加工され、贈答品や土産物として珍重されています。また、玉が持つ神秘性が出雲の古代史や神話などと結びつき、開運や縁結びにつながるものとして、若者にも人気を集めています。特に勾玉は出現の当初から、呪術的・祭的な性格を帯びていたこともあって、地域での特別な立場を象徴する宝飾品でした。その歴史的裏付けがあるからこそ、出雲の玉は空白の時代を経ても復活し、現在も特別な神秘性をもったブランド品の位置を保っているのです。



とんぼ玉を使ったアクセサリー
(とんぼ玉工房 いちの家)



現代に作られた美保岐玉
(出雲玉作資料館蔵)



各種メノウ細工（たまゆら）